

## 教職実践体験実習二年目の試行

国語教育講座・東 賢司

はじめに

原則として年度ごとに報告の科目を変更するように求められているが、「教育実践体験実習」は二年目ではあり、かつ種々の問題があると感じられる。そのために、主たる担当者の判断で、あえて昨年度と同じ科目を取り上げさせて頂くことにした。

### 1. 実施の流れについて

本年度の参加者は、120名となった。昨年度の81名に比較すると、1.5倍増の参加となった。教育実践体験実習は、年間を通じて活動がある。この文書を作成している現時点（平成21年1月21日）時点でも、本年度の報告書作成や成績評価が未終了であるにも関わらず、平成21年度の準備は既に始まっており、説明会を開催し学生達には「参加申込書」を提出するように呼びかけている。

平成20年度に関わる実習については、記録を残していたので、主たる日程・業務内容等を挙げてみる。

月日等	業務内容
10/11	2年以後の実習概要説明会
01/10	実習説明会
01/24	(担当校と意見交換会)
01/18	追加ふるさと実習説明会
02/07	追加ふるさと実習説明会
02/12	参加許可掲示1回目
02/22	実習参加許可掲示2回目
03/05	3月分の実習実施校へ挨拶
03/06	実習参加許可者へ連絡(主任推薦)
03/13	実習報告書・依頼書発送
04/04	松山市教委訪問打合せ
04/24	松山市内実習学生への希望調査
05/20	市教委訪問
5/21	松山市内実習説明会の掲示
5/27	実習松山市希望者説明会
5月末	評価・説明会発送依頼

月日等	業務内容
6月始	実習日誌追加依頼
6/16	ガイダンスの掲示
6/20	学校、教育委員会へ日誌・評価依頼等発送
6/24	受講登録の点検、ガイダンスの追加指示掲示
6月末	実習日誌納品
7/3	ガイダンス
7/11	追加ガイダンス
7/17	松山市内実習の挨拶回り依頼と総務委員に資料送付
7/18	説明会資料のFAX送信
7/21	市教委担当者に説明会開催の連絡
7/24	受け入れ学校対象の実習説明会
7/25	再々ガイダンス
7/30	カリキュラム委員会・挨拶回り分担
9月上旬	実習挨拶回り
10/1	学担へ評価依頼文書と日誌を送付、学部教員と実習委員に訪問記録の催促
10月中	報告書用の写真・報告書整理
10/17	事後指導の発表者の調整、依頼
10/20	事後指導の掲示
10/27～	報告書原稿書き直しの依頼
10/30	1年生説明会(教員養成課程と新課程を分けて実施)、12月意見交換会発送準備
10/31	実習校に実習評価表の郵送催促
11/4	意見交換会・督促状の郵送
11/13	事後指導(学生報告)
11月中	実習報告書編集作業
12/24	実習意見交換会
12/26	報告書原稿入稿
年末年始	報告書送り状にコメント書き
1/23	報告書発送

昨年度と異なる点としては、9月の実習訪問時に学生生活担当教員に指導学生が出向いている学校に訪問して頂いたことである。経費的なことがあり、松山市内の訪問に限定させていただいたが、附属の教育実習に加え、ふるさと実習とプレ教育実習などの行事が重なる時期に応援を頂いたことは本当に助かりありがたかった。

## 2. 省察レポートの提出

単に実習を行うだけではなく、観察を記録し、記録した資料に基づき省察を加えることにより、学習効果を保持して高めることを目指した。

1. 実習日誌…実習の概要、学んだことと反省点、実習担当教諭のコメントを1日分として、活動日すべての記録をまとめて提出

2. 省察レポート…実習の目的にそって記述させた。具体的な記述内容については以下のとおりとした。

①学級経営、学校と地域の連携、教科指導以外の教師の仕事などを観察し、教師の仕事全般について何を学び何を感じたか。

②自分の児童・生徒への接し方はどうであったか。

③観察した授業の展開法はどうであったか。また、児童・生徒へどのような支援が行われていたか。

学生達の省察レポートからは、学生のような学びを読み取ることができる。本実習は、教壇実習は行わず、各学校のそれぞれの特色を各学生が学ぶ形をとっているため、実習で何を学ぶのか、何を学ばせるのかがはっきりしないという指摘がある。レポートから印象に残る記述を記載してみたい。

### 学生1

職員室での先生たちのやりとりもとても印象深かった。毎日、沢山配られる資料、机の上に山積みされた書類、次から次へと迫ってくる締め切り、終わりの見えない行事など、先生たちの目の前にあるものは数え切れないものだった。いくらクラスの子供たち、学校の子供たちのためのものだとは言っても、正直今の私には、自分を犠牲にしてまで捧げることができないかもしれない。…自分が小学生であったとき、先生の大変さや深い優しさに気づくことなどほとんどなかった。自分の中に確固たる信念がないとやっていけない仕事であると思った。その信念を途中で曲げることなく、貫き通せる強さを持ちたい。

### 学生2

校長の講話で教師に必要な資質について教えて頂いた。校長先生からは「自分の教育観」を必ず持つように言われた。教育観を持つには「人のために尽くす」ことが大切だと教わった。「尽くす」という行為を行う身近な方法として色々な幹事（お世話係）をすることを勧められた。幹事は人のために動かなくてはならない。幹事をしてゆくうちに人が楽しめるよう考える習慣が身につくと教わった。

実習カリキュラムの体系から考えると、教育実践体験実習は、個々の学生にとって初期段階の位置付けとなるので、高度な省察等は難しいと考えている。しかし、省察レポート等には、「自分であったらこの場合はこのように対応するだろう」という意見や、「子どもたちへの関わり方」についての、段階的な対応マニュアルのようなものを作成している学生もいて、地域連携実習等で培われた経験の差がすでに表れていることを痛感させられた。

## 3. 報告書の作成

昨年度は、年度途中の計画であったので、準備が不十分であったが、本年度は年度はじめから報告書を作成することを計画していたので、事前指導などで参加学生に呼びかけ、写真や報告書原稿を提出してもらった。

報告書を作成するにあたり、学生のパソコン操作などについての技術が不安になった。原稿は、MS-WORDなどを使用してA4で1枚の40文字×40行で作成し、電子データを添付して提出するよう呼びかけていたが、メールに本文を書いて提出する学生、字数や行数を守らない学生、添付はどのようにするのでしょうか等と質問する学生などが続出し、120名の参加者の半数以上に再提出の指示をした。教師の仕事の何割かは、事務文書作成であるのでと説得し、再提出してもらったが、話を聞いていないのか、資料をみていないのか、技術的な問題なのか、今後も注意する必要があると痛感した。

また、この報告書は学部としてこのような活動をしていますという以上に、実習の引き受け校に「おかげさまで。ありがとうございます。」という感謝の気持ちを込めたものであるという作成の趣旨を伝えているが、一人が1600文字書くスペースができるところに、わずか500文字ほ

か書かれていない学生もいた。10月始めから編集を始め、12月26日の原稿入稿までこのようなことを繰り返したが、最後まで書き直した原稿が提出されない学生が10名以上いたことは残念でならない。

それでも、150頁の報告書の大半は学生の文書によって構成されている。実習もその後もよく頑張ってくれたと思う。また、多額の予算がかかったが、一つの形としてまとめることができたのは、学部の援助を始め、教員・委員や事務の方の献身的な努力によってなされていることをかみしめている。

#### 4. 問題点

報告書の作成をするために、1年間の資料を整理してみると、年中何かしらの活動があることが分かる。それだけ多くの方々にご迷惑をおかけしている実習である。

さて、教育実践体験実習は、期間も趣旨も通常の教育実習とは異なるので、本年度も「何をどうしたらいいのか？」という会話を耳にすることが多かった。また、評価についての疑問も多く出された。「4年生と同じレベルで評価してよいのか」とか「評価基準がほぼ附属の実習に準じているようであるが、ふるさと実習の趣旨と一致しないのではないか」等がそれである。

また、9月の実習終了後、120名の学生から寄せられる「省察レポート」「写真」「報告書用レポート」に目を通し、評価をしたり報告書原稿の書き直しを指示したりしているうちに12月となってしまった。また、学校から返却された「実習日誌」や「評価表」のコメントを読んでいると、一人一人の学生の実習の特徴がよく把握できた。

しかし、気になる点も多くある。学校側から指摘されている多く寄せられている問題点には、以下のようなものがある。

- ・子どもとの会話のきっかけがつかめないようである。
- ・子どもをきちんとしかる態度が弱い。
- ・指示待ちの態度が目につくことが多い。

また、学生のアンケートから、大学の対応についてのまずさが指摘されている。

- ・種々の書類の送付が遅い。
- ・実習の趣旨が理解できない。直接説明を聞きたい。
- ・実習時期について、考慮してほしい。
- ・守秘義務についての指導が十分でない。
- ・実習説明会や意見交換会の日程が悪い。
- ・実習時の大学教員の訪問に問題がある。

これらの指摘は、短い時間に記述させたアンケートから抽出したものである。学生達の説明や意図がはっきりわからないところも、潜在的には大きな問題を含んでいると感じている。学生に対して指摘されているものには、附属実習でしばしば指摘される「自分から進んで動くことができない」という点に共通する内容が含まれ、学生自身が問題点と自覚する「こどものしかり方」について、実習校でも未熟と捉えている点である。

また、学生から大学に寄せられた問題点についても、準備段階の説明不足や1つの学校に複数の教員が日時を違えて訪問したこと等、細かい配慮が不足していた部分が多く見られた。

いずれにしても、上記の指摘について、改善できる点についてはすぐに改善し、次年度の活動につなげてゆけるよう準備している。この時期は、プレ教育実習もあって、特に県外の学生には、網渡り的なスケジュールを組ませているが、それにほころびが生じているとは言い切れない。

また、前述したが、この実習は、実習を実施するまでに学生の報告書等を提出させることが多いが、それらに不備が多く、教員としての事務能力の向上にも配慮する必要があることを痛感している。学校側の説明には、多くの場合、学生が直接当たっている。説明が的を射ず、意を尽くせぬことが頻出している。

2年生の9月は多忙である。9月最初からふるさと実習、9月の半ばにプレ教育実習のガイダンスと実習がある。その合間には実習のレポートの締切に追われる毎日である。既に「実習疲れ」や「教員になる目的をなくした学生への対応」などの声があがっていることにも注意しておく必要がある。

平成20年11月には、三重大学の日本教育大学研究集会において、愛媛大学教育学部の教育実践体験実習の取り組みについて報告させていただいた。類似の取り組みは全国の大学に見られるが、100名単位の活動、どこの課程・コースに所属する学生でも参加できる継続的な取り組みはなかったように思う。この実習を企画した「教員養成カリキュラム再構築」のメンバーの先進性を改めて確認できる場ともなった。

本実習に参加した学生が異口同音に発する感想は、教師の毎日は、子どもに追われ、業務に追われている、さらにそれがずっと続いているということである。それでも教師になりたいと希望する学生が育ってくれることを切願している。